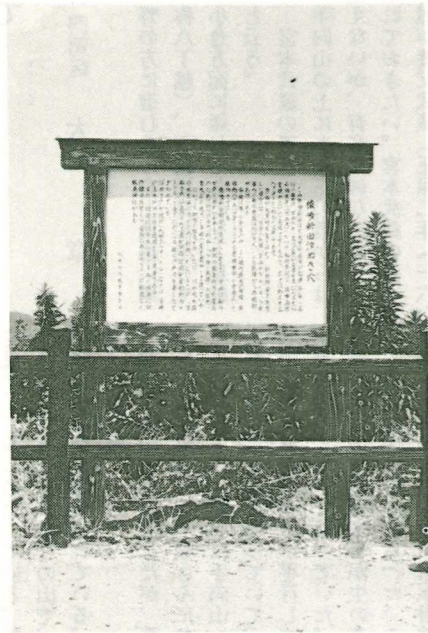


北九州市の文化財を守る会

会報

No. 57. 62. 1. 1

発行 北九州市の文化財を守る会
北九州市小倉北区鍛冶町一丁目7-2
森 鷗 外 旧 居 内
電話 (093) 531-1604
印刷 博文堂印刷所
北九州市小倉北区長浜町2-22
電話 (093) 511-1011



石原宗祐翁頌徳碑並びに
汐ぬき穴の説明板が建設さる

門司支部長 吉岡 成夫

旧企救郡大里村の庄屋だった石原宗祐翁が同郡猿喰村に新田開作を思いたち、事業に専念するために大里村の庄屋役を辞任したのは宝暦七年(一七五七)、翁が四十八才の時だった。その後、三年の歳月と、莫(ばく)大な私財をなげうち、何度も挫(さ)折しそうになる心身を鞭(むち)打ち約三十三町歩の新田を得ることが出来た事績に就ては、北九州市内小学校の社会科教科書に掲載されてからは広く知られるようになったが、それでも中には不心得者がいて翁が苦心の末に岸盤をくりぬいて造った汐樋、通称汐ぬき穴附近に塵芥(ごみ)を捨てた者が絶えなかった。そこで文化財を守る会では、この汐ぬき穴附近の説明板を建てたら塵芥を捨てる者も余程少くなるのではなからうかという判断のもとに、かねてから文化課を通じて教育委員会に陳情書を提出していたが、今度写真のような立派な説明板が建てられたことは地元はもちろんな、私たち文化財を守る会としても大変喜ばしいことである。なおまた、門司区内清見から猿喰区に移建された福岡県立北高校の正門前附近に写真のような、元参議院議員、元門司市長柳田桃太郎氏の素晴らしい筆になる石原宗祐翁頌徳碑が地元民の熱意によって昭和六十年三月建設されたことは説明板建設と併せて喜ばしいことで、さぞかし泉下の翁も満足されているのではなからうかと翁の気持が推し量られて文化財を守る会の一員として頼もしく思われ、会報紙面を借りて教育委員会、文化課へ御礼を申し上げる次第である。
ついでに附記すると宗祐翁から六代目の子孫に当る広義氏は旧企救郡松ヶ江村々長にも就任された人で、猿喰海岸に明治二十三年煉瓦工場を設立し、そこで製造された赤煉瓦で建設されたのが門司区清滝に現存する旧九鉄本社の建物である。

つよきもの迎 恐るべからず。
よはきものとてあなどるべからず。

〔翁教示〕より

直三上
たかひかる日嗣の皇子はあれましてわが日の本は八千代なりけり
定司上
大内山神の雄たけびさながらに日嗣の宮の玉のうぶこそ
有太郎上
おほ御子の生れまししより君か代の千代の栄えもいちじるくして
荒五郎上
高光る日つぎの御子のあれまして朝日さやけくをろかみまつる
伝吉上
たかひかる日嗣の御子はあれましぬ我が日の本の栄えしられて
力上
御国へのひかりもそひて高光る日つぎの御子はあれましにけり
梅次上
高光る日嗣の御子のあれましていよよかがやく大八洲くに
真佐子上
みるぎなき御世とばかりに高光る日つぎの皇子はあれましにけり
つよ上
かけまくもあやに畏き日の御子の千代のさかえを祝ひまつりて
マサ上
浦安の国の内外にかがやきて日つぎの皇子はあれましにけり
フジエ上
社頭杉
戸の上の神の齋にたてる杉御稜威とともに仰かれにけり

斥吉上
いつの世の根さしなるらん広前に神さびたてるすぎの老木は
高信上
萬代に打仰れて戸上の神のみいつもたかき老すぎ
開作上
うぶすなのみ前にたてるあや杉に神の御稜威も仰かれにけり
久次上
やひら手の音さへ絶えて夕まくなみ木の杉はかみさびにけり
直三上
戸上の神のいすきの老杉は幾千代かけて立さかゆらむ
鶴吉上
うち仰ぐ戸上の嶺のかみすぎに八千代のいろも見えわたりつ、
定司上
天地のいぶきの霧にみそぎして戸上に仰ぐ杉のむらたち
有太郎上
戸上の齋庭に立てる老すぎにふるきむかしもしのばれにけり
荒五郎上
かみがきの八千代護りてとしのはにたち栄ゆるむ二重の老すぎ
梅次上
やしる守る絆とばかりに立ちならぶ戸上の杉のこけのけだかさ
伝吉上
とことにはにたち栄えゆく神杉の木の間に見ゆる国つ御社
力上
江戸時代末の嘉永二年(推定)

新指定文化財の紹介

市は去る十一月一日、昭和六十年一度市指定文化財として、次の一件を指定しました。
有形民俗文化財
板絵着色三十六歌仙図絵馬
三十六面
所在地 若松区赤島町14番12号
所有者 白山神社
江戸時代末の嘉永二年(推定)

広前にたちさかえたる老すぎは神につかへて幾代なるらん
真佐子上
千早振る神のみいつも仰がれていよいよたかし戸上の杉
つよ上
いつの世の根さしなるらん打あふぐ戸上山の神のほこすぎ
マサ上
晴れわたるみ空に影のあふがれてみどりも清き戸上嶺の杉
フジエ上
昭和八年十二月吉祥日
六十六翁南峯陳人謹書
以上の通りであるが、今から約五十三年前の国を挙げてのお祝いに庶民の喜びの音が聞こえてくるようである。
ほかにこのような奉祝詠進が有れば御紹介いただきたいものである。

白山神社に奉納された一人一面形式の三十六歌仙図絵馬。絵は福岡藩御用絵師の一人であった衣笠守由(名は要、福草舎と号す)、和歌の書も同藩士で、天保年間に炭奉行をつとめた山本喜惣次利為である。
奉納者については徴証する資料がないので確定できないが、この神社にあるもう一面の大絵馬(文化八年一八一、藤木村庄屋・副田大八郎奉納)の額縁を大八郎の孫、副田三三太が嘉永二年に再興していること、大絵馬の作者が衣笠守由であること、さらに副田家が代々同社とかかわりが深いことなどからして、副田家の奉納と考えられる。
市内における一人一面形式の歌仙図は十数件伝存しているが、その中でもこの歌仙図が最もすぐれている。部分的には剥落も見られるが、総体的に保存状態も良好で絵師、衣笠守由の画風を知る上に貴重な資料である。

なお白山神社ではこの絵馬の保護のため、一般公開を控えています。したがって市教育委員会では写真パネル(サイズ・半切)を作成し、若松市民会館郷土資料室に展示しています。どうかご覧になって下さい。展示期間は六十一年十一月一日から六十二年三月三十一日までです。
事務長の今村保氏が病気のため十二月初旬に退会されました。したがって、上原一義氏が当分の間、事務を代行しますのでお知らせします。
会報第五十七号は門司支部の担当でしたが、前記事情で発行ができませんでした。
なお次号(六十二年三月発行予定)は八幡西支部の担当です。よろしく願います。(事務局)

編集後記



門司口往還に沿うて

門司区 大田 章

小倉城下の東端門司口門を出て砂津川(昔の外濠)にかかると門司口橋を渡り長浜浦(漁村)を通って、大里・門司方面に向う門司口往還(旧国道)に沿うて、昔を偲びながら大里松原付近迄の様子を記してみよう。

※ 現在は海岸が埋立てられて、昭和四十五年十二月から国道百九十九号線が開通し、昔の海岸線の沖合を走っているのが、海岸の様子が随分変わっている。大里馬追舞口説に

「……企救の高浜根上り松よ つづく赤坂延命寺さん 延命寺を過ぎて海岸の道路(下鳥越)を進むとやがて水掛地蔵に

野の方に進むものを上鳥越(通称八丁越)、下側海岸に沿うて小倉方面に通じるものを下鳥越と云う。 一 宮本武蔵の碑 手向山の上のあり下の道からは見えないが、有名な碑なので一寸ふれておきたい。宮本武蔵の養子伊織が養父武蔵(正保二年(一六四五)五月十九日熊本で没した)を偲んで、小笠原忠真公から拝領した手向山の上に、承応三年(一六五四)四月十九日に建てたもので、古くから北部九州第一の名碑と云われていた。碑文は武蔵と交遊のあった熊本泰勝寺の春山和尚の記したもの、時代も遷り明治二十年この山に砲台を造る事になり、碑は一時延命寺山に移設されたが、戦後昭和三十七年頃、久しぶりに旧地に里帰りしたものである。此の地に昭和二十六年四月十日に佐々木小次郎碑が建設された。碑には次の様に書いてある。 小次郎の眉涼しけれ つばくらめ 村上元三書 慶長十七年(一六一二)四月十日三日巖流島に於て決闘した両剣豪の碑が、僅か数mを隔てて、遙か北方の海に霞んで見える巖流島

を見下して並んで立っている。今は毎年四月十三日にこの山で、武蔵小次郎祭が開催されている。

二 水掛地蔵 話が手向山の上でそれだが、再び元の道に戻って、地蔵さんに参ることにしよう。戦前は手向山の山裾が海岸近くまで伸びていて、国道と電車道と汽車道が平行して山裾を曲りくねって通っていた。道路脇は松の木や雑木等が生い茂って薄気味悪い所さえあった。その道の山側の奥まった所に水掛地蔵があった。従って現在の地蔵様は随分高い所に位置が変っていることになる。次に古老の話を記してみよう。

三 地雷火 丙寅の御変動(慶応二年(一八六六)の小倉戦争)当時、小倉方が長州勢の来攻を知らせる合図の地雷火を、水掛地蔵の少し大里寄りの所に仕掛けて、対戦準備に余念がなかった。時に畑村玉泉寺の小僧が小倉にお燈明の油を買いに行く途中のこと、何か妙な紐が有るなあ位の子供供で、ちよいと引張ったのが例の火縄であった。轟音一発地雷火は破裂した。すは長州勢の来攻と小倉側は大騒ぎをした。小僧も意外の物音に驚いた。幸いにも怪我は無かったと云う挿話も残っている。

四 清水谷 しばらく行くと、道は八丁越の上り角の所にかかる。此処は清水谷といって落ちちまて(一段低くなつた所)で、賭博場として有名な所であった。丁度開催中に赤目付と云って赤筋の羽織を着た目付が廻って来ると、それを大変な事になるので、一同は見張番をつけて、彼方此方に気を配りながら熱中している時、それ来たと云う見張の合図があると、気の利いた一人がつかつかと立って行って、紙包みにした幾らかの金子を赤目付に握らせる。彼はだまって受取り知らぬ風をして通り過ぎながら、小声で『もう今日は誰も来ないから御利益観面で、参詣人も従って多

かった、とのことである。

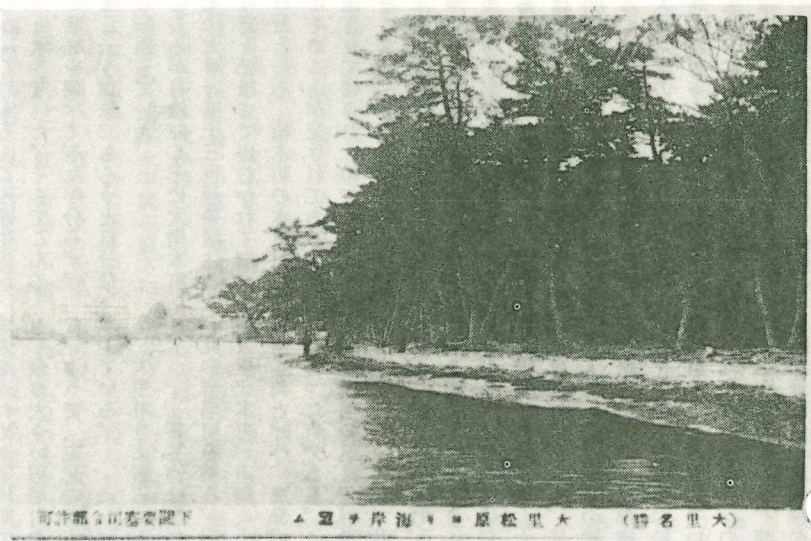
五 高札場 従来の電車道汽車道を越えて、愈々新町村の海岸へ出る。此の付近は小倉城下の門司口門を出て、大里本町の宿場に至る道のほぼ中間の位置に当る所である。 中川橋の東岸に昔は高札場があつて、白壁塗の上屋の中に高札が一枚立っていた。高札(制札)は一般庶民に法令を公布する為の便法として案出されたものである。 大体その地方の最も人寄りの多い土地を選んで立てたもので、暴風火災等の場合には、其の地の庄屋方頭・五人組等は特に警戒を加え保護する事になっていた。

六 馬の給水場 高札場から程近い道路沿いの山側に、通称「池の端」と呼ばれていた旧家がある。道角の土蔵の横の小路を通って左側の門を入ると玄関先の広い庭の山側に大きな池がある(一間半に四間位の長方形)常に綺麗な清水が渾々と湧き出ている。昔参勤交代の大名行列が此処を通過する時は、一時馬を止め

出しか成広くなっていた。 地蔵様の御利益は、コヅキ(咳)を治す事とイボ(疣)を除ける事で、此処のお水を頂いてつけると御利益観面で、参詣人も従って多

らゆつくりやれよ』とは、古老の見聞談である。

御変動の小倉が負けて企救郡が長州支配の頃、松原の大木や戸上山の杉等大きな木を伐って大里の浜で筏に組み馬関に漕いで帰ったとの事である。 御変動の年の七月大里の町家三百余戸を焼き松原方面に進軍した長州軍と小倉軍は、此の松原で大激戦を行い、此の時小倉軍は野戦砲に石をつめて打ち長州軍をなやましたと云う話も残っている。



大里松原より海岸を望む

て水を吞ませ一息入れていた池で、馬にとっては大変有難い恵みの池であった。と、当家の主人から伺ったが、往還筋では一寸趣の変わった貴重な存在である。当家は明治のはじめ、「池の端」に因んで池本姓を名乗ったものと思われる、現在の当主は池本國光さん(七十八才)である。

池本家のすぐ隣(小倉側)が有名な西露山先生のお宅で、明治初年近くの福江氏宅で寺小屋を開いて子弟の教育にあたられた。先生は学徳共に高く(詳細略)、後年弟子達が先生の遺徳を偲んで、東新町の墓地に大きなお墓を建てている。(自然石の高さ三m余)

七 新町の寺子屋 西 路山先生之墓

古老の云う、子の年の大風とは文政十一年(一八二八)八月九日の大風雨を指すようであるが、此の時は誠に被害甚大で、松の木の大部分は倒れ、有名な大里沖の与次兵衛ヶ瀬印も倒れたとの事である。その後度々松の補植をしたことが庄屋の記録に見えているが、次には松苗植付について古老の話を参考に記す事にする。

八 松原 ある説によると、企救の浜は門司区と小倉区の間で白砂青松の全海岸線を指すとも云われているが、小倉方面から続いて大里松原も、屋尚暗き迄に松がうっ蒼と生い茂っていて、昔は大里名所の一つになっていた。それが戦中戦後の潮流の關係や附近の煤煙等の為に、段々枯れてしまつて、現今ではサツポロビル会社に一本残っている位である。昭和四十七年の大里海岸地帯の住居表示変更により、通称一番橋から西に向つて、松原一丁目、二丁目、三丁目と名称だけが残っているのも淋しい限りである。

柳ノ御所の西方一帯の字名は土地台帳によると「字浄生寺、寺の前、あんの前」等となっている。今は寺はないが観音堂が残っている。昔は大きな寺があつたと云う事である。私が子供の頃柳村に本田栄吉と云う海軍出身の柔道の教師が居られたが、宮崎医院の前の国道をへだてた海側に道場があり整備もされていた。私の家にも良

く遊びに来られたが、或夜のこと傍でこんな話を聞いたことがある。秀吉が韓国出兵の折と云うから慶長年間のことだろうが此の浄生寺は兵隊の宿舎となり、兵士が本堂からはみ出て縁側まで寝ていたと云う昔話をされていた。 今の戸ノ上通りと御所の前の通りとの交叉点が墓地で五輪の墓石が沢山あった。

門司区 石崎 巖

此の寺は細川が肥後に転藩となつた際に肥後に移されたが大師堂(観音堂)だけは残されたのである。その事が御詠歌になっている。

引きとりて大師は弥陀の糸柳  
これもころん浄生寺かな  
ころんはシルクロードの崑崙山脈から出た名前、お寺と云う意味である。

ところが郷土人は何んで間違えたのか「これろんごん浄生寺かな」と歌っていた。そこでころんの意味を調べてみたが分らず、勿論と云う意味であろうと自分ながら判断していた。

西光山大専寺第十三世西勝廣住職様は態々肥後まで出むかれて調べられたところ、植木町の木葉村々誌にそのことが記されてある事を確認されて帰られたのである。

そこで尚一言附言したいのは、同木葉村々誌に依ると柳村の崑崙山浄生寺と小倉の雲龍山永照寺を肥後に移した事になっている事である。この事はよく調べてみなければと思うが、今まで門司の郷土史関係の出版物に誤り事を記しているの訂正しなければならぬ。

天明六年の寺院録には浄生寺は柳浦山西生寺末となっている。又西生寺の本山は京都粟生の西山浄土宗光明寺である。

### 我が町の懐古

大里本町(現門司区大里本町二丁目)は、昔江戸時代の宿場町であり、九州より本州に渡る場合、大里は潮流や道路等最も良い条件を備え、江戸や上方への上り、下りの九州最先端の渡海駅として、繁栄をきわめた宿場町である。尤も、余り大きい宿場町の規模ではないようで、左記のような俚語も残っている。

大里町さよ宿ぢやといゆる  
茶釜竹ほどない町を  
此の宿場町を狭み、街道の北側を大里北本町、南側(小倉方面)を南本町と呼び、農漁村の町で、私の育った町である。

此の大里の名は、御承知の如く、寿永二年(一一八三)平家一門が安徳天皇を守護し奉り、此の地に御所を定められてより「内裏」の通称名で呼ばれる様になり海岸側の街道筋の町に定着したとの事、年代は詳ではないが、元和八年(一六二二)七月当時の細川藩が領内諸調査の折の規矩郡家人牛馬御帳や、天保十四年版の絵図にも「内裏村」と記載されているが、此の内裏が大里となったのは享保八年(一七二三)の頃、時の藩主小笠原忠雄公が、異国船平定の朝

命を受けし際、内裏の海で血を流すことは恐れ多しとし、今の大里の字に改めたとの事である。

大里宿場町として特筆すべきは、象の大里よりの渡峽である。享保十三年(一七二八)徳川中興の英主と云われた吉宗將軍の所望により、広南国の象牝牡二頭が、享保十三年長崎につれ渡られたが、牝の方は長崎にて死亡、牡の方は、七才、長さ一丈、高さ五尺五寸、胴の周り一丈一尺五寸、足の長さ二尺二寸九分の如し、耳一尺二寸、牙一尺四寸、鼻の長さ三尺五寸、屋の間は寝ず、夜四つ(十時)前後一ト時ばかり鼻を枕にし四足を伸べ横に寝ると云う、一日の行程凡そ三里単位、物を背負はぬ時は六七里位歩行する、とあり。此象を江戸迄引き行くに付いては「象付御用掛」と云う妙な付添の一組が任命された。

象付 通事 漳州人 李陽明  
象付 通事 広東人 陳阿印  
御用掛り  
長崎奉行在番渡辺出雲守を始  
御請方 年行事 御用通事等十三人  
象使いの夫婦もの  
男 潭 数(四十五才)

命を受けし際、内裏の海で血を流すことは恐れ多しとし、今の大里の字に改めたとの事である。

大里宿場町として特筆すべきは、象の大里よりの渡峽である。享保十三年(一七二八)徳川中興の英主と云われた吉宗將軍の所望により、広南国の象牝牡二頭が、享保十三年長崎につれ渡られたが、牝の方は長崎にて死亡、牡の方は、七才、長さ一丈、高さ五尺五寸、胴の周り一丈一尺五寸、足の長さ二尺二寸九分の如し、耳一尺二寸、牙一尺四寸、鼻の長さ三尺五寸、屋の間は寝ず、夜四つ(十時)前後一ト時ばかり鼻を枕にし四足を伸べ横に寝ると云う、一日の行程凡そ三里単位、物を背負はぬ時は六七里位歩行する、とあり。此象を江戸迄引き行くに付いては「象付御用掛」と云う妙な付添の一組が任命された。

象付 通事 漳州人 李陽明  
象付 通事 広東人 陳阿印  
御用掛り  
長崎奉行在番渡辺出雲守を始  
御請方 年行事 御用通事等十三人  
象使いの夫婦もの  
男 潭 数(四十五才)

以前は十年一昔と言われていたが、産業経済優先又これに附随する道路網の建設・拡張にて僅か数年にして町も、生活様式も急変する、現在こそ文化財を守る事の重要性を痛切に感ずる次第である。

門司区 大田 武

### 女 潭 綿(三十五才)

此兩人は乱れ髪、下に紅色の紗上に萌黄練り綾を着し、二尺の鳶口を手纏にし、象に打込み打込み自由引廻し、背上に毛氈を敷き四方を鉄の鉾にて打ちつけ、その上に乗ると云う出立ち総勢十七人、鳶口の疵は星の光りて癒ゆると云う事であった。象に関する調査は間もなく江戸に送られ、翌十四年二月勘定奉行稲生下野守から、道中宿駅に送られた触書の一二を見る

一見物は差支へなきも、大勢騒敷き時は象を怒らすから物静かにすること  
一道路、橋等を堅固に修理する事  
一水桶を道端に用意する事  
一道路の町々村々にては、スタレ、ノレンは禁物、異様の看板は引き込める事、等々

將軍による至上命令にて、象に対する配慮は大変なものである。三月二十四日、長崎を発足した一行は、筑前口御門から悠々と小倉城下に入り込んだ。見物の群衆は数日前から弁当を背負って出かけた路傍に夜を明かすもの不少、城下の雑踏は開府以来と称せられ、領主忠基公一覽の後、此夜は室町の町会所に宿泊したとの事。又象の宰領方長崎奉行従五位下出雲守渡辺外記永倫は、数年前小倉沖唐船

打払に目付として下り、時の若君忠基公と謀り、首尾よく事を収め、功勞によってであらう長崎奉行に昇進した人では象の世話方として、又忠基公と再会し、渡峽工作を打合せ、小倉港頭よりの積込みは中々困難との結論から、大里に引き行き、大里から渡し下関に陸揚げし最大難関を予想されて居た渡峽も手際よく成功し、中国道を悠々と上り四月八日京都着、二十三日中御門天皇の觀覽に供し、象に従四位を与へ、御製の歌を賜はり、東海道を上り、五月二十五日無事江戸着、二十七日城中大広間の御庭に於て、將軍待望の一覽に供した、との事である。

切て此の大里南本町街道筋を小倉方面へ、上は八丁越まで、下は企救の高浜へと続く、海岸沿いが松原街道で、大里南本町より、松竹橋の間は、白砂青松の景勝の地であり、子供の頃は、大里松原海水浴場があり、休憩小屋が立並び貸ボートが松林の中に多数をかれてをり、夏は花火大会や映画等の催しにて賑わったものである。又十月二十一日には大里地区の産土神社として大里住民の崇敬厚き戸ノ上の神社の神事が此の松原で齊行された。此れは寛平年間(八八九一八九八)此の海岸より戸ノ上神社の御祭神がお上りになり、最初此の松原の根二の松の元に安置された

との由来により、汐かきの神事が行なわれ、五体の喧嘩輿又各町内の大鼓も神輿に付き従い、勢揃いし、荘厳な祝詞奏上、流鏑馬の神事が行われ、松原は遠近を問わず参拝や見物の人々で松原は一杯であった。松竹橋より小倉方面は、玄海よりの風波を正面に受けるため真磯の石浜で松の根元も潮に洗われ、「企救の高浜根上り松よ云々」と歌われた風光明媚な街道であったが、現在は海岸沿いの街道も松は皆無となり、埋立により遙かな陸地の工場街となり海岸側には一九九号線が通じ、又其の海岸側にも工場或はデパート等の集荷場が並んでいる。南本町より遠望すれば前方の彦島と小倉の間は遙かに玄海の水平線がひろがり、大きく真赤な太陽が水平線の彼方に沈む風景は宛ら一幅の絵画を見るようであったが、埋立により大里より遠望すれば丁度、彦島と小倉は、陸続きの如く見え嘗ての水平線はなく、工場の煙突が林立し太陽が烟たそうに煙突の中に沈んでいる又記念碑等も同様で、会報三七号にて門司支部理事の是則氏が「適材適所」と題し、明石与次兵衛塔の事を掲載されましたが、六本松沖の与次兵衛塔の石柱も現在は、門司港の和布刈公園に再建されている。又明治三十五年秋の熊本陸軍特別大演習を御統監の為

### 海峡随想

門司区 吉岡 成夫

「判官(ほうがん)びいき」と言う言葉があるが、関東や東北の人ならばいざ知らず、九州人は「平家びいき」であつても決して判官びいきではないと私は頑くなくそう信じている。九州に源氏にかかわる史実や伝説が皆無に等しいに較べて平家にかかわる史実や伝説に枚挙にいとまがない程あることは何よりの証拠であると私は考えている。

私は我が国の代表的国民文学を一つだけあげよと言われればなんのためらいもなく「平家物語」をあげることにしているが、二位の尼が可愛い孫でもある今年八歳になる安徳天皇を抱いて、ここ関門海峡の渦潮の中に入水しようとす

め、明治天皇は下関より御召船にて大里に御上陸遊ばされた。此の御聖蹟保存のため、御上陸の地(大里本町の御幸町通り海岸)に玉垣の中に記念の松を植え「明治天皇記念之松」と刻まれた石碑が建設されたが、現在は場所も変り南本町(現門司区大里本町三丁目)海岸の漁船築港入口の波止の突端に移されている。前述の様に昔日の面影は皆無である。民俗、美術工芸等に於ても同様と思われる、

以前は十年一昔と言われていたが、産業経済優先又これに附随する道路網の建設・拡張にて僅か数年にして町も、生活様式も急変する、現在こそ文化財を守る事の重要性を痛切に感ずる次第である。

門司区 吉岡 成夫

るとき幼帝が「尼せ、我をばいづちへ具してゆかんとするぞ」と尋ね、尼せが「浪の下にも都のさぶらふぞ」と答え、やがて入水する先帝身投の章は何度読んでも読む度に涙が溢れ出てくるのをどうしても押さえることが出来ない。それに平家方の実質的指揮官だった平知盛が壇ノ浦合戦に先立って部下の武者たちに対して「軍は今日ぞ限る。者共少しもしりぞく心あるべからず。雙なき名將勇士と言へども、運命尽きぬれば力及ばず、されども名こそ惜しけれ」と言った言葉。そして今まさに運命尽きようとす平家の最後を見定め、鎧二領を着て乳人子と手を取り合せて急潮の中に入水せん

日本には海峡と名づけられるものが二十以上もあるそうだが、私

はその海峡の一つ一つを見たわけではないが関門海峡はその歴史といい、風景といい二十以上もある我が国の海峡の筆頭に位する海峡だと思つている。だからこの海峡を題材とした昔から今になるまで多くの文人墨客たちによる詩歌や文学作品が無数と言っても良い程残されているのだろう。例えば最近のものでは対岸の長府在住の作家赤江澤氏はその著「海峡」の中で「海峡は、国と国、人と人、世界と世界を隔てる確然とした水の境域である」と誌しているが、歌人塚本邦雄氏はこの著を評して「海峡は夢魔の創造したものだと評している。

門司区 吉岡 成夫

海峽は夢魔が創造したものだという言葉を理解出来る程の詩心が私には無いのが残念でたまらないが、同じく長府に在住した今は亡き作家谷川修氏はその著「住吉詣で」の中で、「本州と九州を分ける関門海峡は古来、現実と越(こし、黄泉)の国との境界とされて、古代では九州側が現実の国であり、本州側が越の国であった。従つて関門海峡は、九州側から越の国へ向う入り口という意味で「穴門」だった」と誌しているが、古代史の解明に特異な才能のあった作者の言葉に私は関門海峡をめぐる古代史のロマンに憧れずには

日本には海峡と名づけられるものが二十以上もあるそうだが、私

